

平成30年9月の現況と10月の対策（野菜）

現況（30年9月20日現在）

1 施設野菜

果菜類

(1) トマト

若狭地区の越夏栽培は、19～22段果房を収穫中である。

抑制栽培は、福井、南越地区では5～6段開花で9月下旬から出荷見込み、坂井地区では8月下旬から収穫が始まっている。

若狭地区の越冬栽培では、3～5段果房を収穫中である。

うどんこ病、灰色かび病が微発、オオタバコガ、コナジラミ類が微発である。

(2) ミディトマト

奥越地区の夏秋栽培は7～10段果房を収穫中である。

抑制栽培は、福井、坂井、南越、若狭地区では、1～4段果房を収穫中である。高温による花数の減少と草勢の低下により、着果数は少なく小玉傾向である。

坂井、二州、若狭地区の促成長期どり栽培は、9月14日から出荷が始まっている。

葉かび病が微発、トマトサビダニ、ハモグリバエ類が少発、コナジラミ類が微～少発、アザミウマ類が微発である。

(3) キュウリ

福井、南越、二州地区の抑制栽培では9月上旬から出荷が始まっており、現在側枝を収穫中である。10月下旬まで出荷が続く見込みである。

うどんこ病、コナジラミ類、ハモグリバエ類が少発である。

(4) アールスメロン

三里浜砂丘地では8月25日から、坂井北部丘陵地では9月10日から収穫が始まり、果実肥大は良好である。

つる枯れ病、べと病、黒点根腐病が少発、アブラムシ類が局中発、ハダニ類が少発である。

(5) イチゴ（高設）

福井、坂井、南越、若狭地区では、8月下旬～9月下旬にかけて定植されている。

葉根菜類

(1) 軟弱野菜

福井地区のハウレンソウは、8月上旬播種が約35日で収穫となっている。

(2) 青ネギ

若狭地区の周年水耕栽培は、7月上旬播種分を収穫中である。播種から収穫までの日数は、57～60日である。

(3) 白ネギ

坂井北部丘陵地では、定植後の生育は順調である。

ヨトウムシ類が少～中発である。

2 露地野菜

果菜類

(1) ナス

奥越地区では、気温の低下とともに出荷量は少なくなってきたが、継続出荷中である。

うどんこ病が微発、カメムシ類が少発、アブラムシ類、アザミウマ類、オオタバコガ、チャノホコリダニが少発、ヨトウムシ類が微発である。

(2) ピーマン

丹生地区では、草丈130cm、第2果房開花で第14～15果房を収穫中である。

青枯病が少発、斑点細菌病が一部中発である。

(3) エダマメ

二州地区では、9月13日に出荷終了した。

(4) キュウリ

丹生地区では、9月中旬でほぼ出荷終了した。

葉菜類

(1) 白ネギ

4月上旬定植は、坂井、二州、奥越地区では15～23mmで、収穫中である。

4月中下旬定植では、坂井、奥越、二州、若狭地区で、葉鞘径が19～26mmで収穫が始まっている。

5月上中旬定植では、福井、奥越、南越地区で、葉鞘径が17～20mmとなっている。

5月下旬定植では、福井、若狭地区で、葉鞘径が12～18mmとなっている。

6月上旬定植では、坂井、若狭地区で、葉鞘径が11～14mmとなっている。

9月に入ってから、伸長、肥大とも順調に進んでおり、生育は平年並み～やや遅めとなっている。

白絹病、軟腐病が少～中発、萎凋病が微～少発一部中発、さび病が微発、ハモグリバエ類が中発、アザミウマ類が少～中発、ヨトウムシ類が少発、ネキリムシが微発である。

越冬どりは、奥越地区では葉鞘径が7mm程度となっており、定植後の降雨によって活着し生育は良好である。

ハモグリバエ類が少発である。

(2) キャベツ

坂井北部丘陵地では、7月中旬定植が球径10～15cmで、9月下旬から出荷が始まる見込みである。

各地区の水田地帯では、7月下旬定植が球径10～12cmで、10月中旬から順次出荷が始まる見込みである。8月上旬定植は、球径5～9cmとなっている。また、8月中～下旬定植は、結球開始～初期となっている。

根朽病が少発、根こぶ病が一部少発、ヨトウムシ類が少～中発、コナガが少発、オオタバコガが微～少発である。

(3) ブロッコリー

福井、坂井、南越地区では、8月上旬定植が出蕾直前となっている。
根朽病が微発、オオタバコガ、ヨトウムシ類が少発である。

根菜類・いも類

(1) ダイコン

三里浜砂丘地では8月16日から、坂井北部丘陵地では8月20日から播種が始まっている。
台風により、葉の傷みや生育遅延が見られる圃場がある。10月上旬から収穫が始まる見込みである。

コナガ、シンクイムシ類が少発である。

(2) ニンジン

坂井北部丘陵地では、8月上旬播種が本葉6枚で肥大初期となっている。

三里浜砂丘地では、8月中旬播種で本葉3枚となっている。台風により欠株が発生し、播種し直した圃場がある。

(3) カンショ

坂井北部丘陵地では、8月13日頃から出荷が始まっている。肥大は平年よりやや小さめであるが、イモ数は多い。

ナカジロシタバが中発である。

(4) サトイモ

奥越地区では、草丈が95～115cm、生葉数3～5枚となっており、伸長停止期は8月末～9月上旬で平年並みとなっている。台風により、葉の傷みは大きい。

アブラムシ類、ハダニ類、スズメガ類、ヨトウムシ類が少発である。

(5) ラッキョウ

三里浜砂丘地では、植付けが一年掘りで8月中旬～9月上旬に終了、三年子で8月中旬～10月中旬まで行われる予定である。植付け後の降雨に恵まれ、芽立ちは平年より早く良好である。

(6) タマネギ

永平寺町では、9月5～16日にかけて播種され、発芽は良好である。

坂井地区では、9月5～8日にかけて播種された。

対策

10月の気象は、気温が平年並みから高く、降水量が平年並みから多い見込みである。引き続いて、病害虫の発生状況に留意して適切に防除する。施設栽培においては、気象変動や生育に応じた肥裁管理、水管理を徹底する。また、台風の襲来や大雨が予想される場合には、事前に十分な暴風対策や排水対策などを講じておく。

1 施設野菜

果菜類

(1) トマト

保温目的にハウスを密閉にする場合、密閉状態にするとハウス内が過湿になり、病気や裂果の発生を助長するので、夜間であっても少しサイドを開けて換気を行う。ただし、最低気温が10℃を下回るようになる頃（10月下旬）からは、裂果が発生しやすくなるので注意する。

裂果の発生原因には、①多かん水等による水分・肥料の急激な吸収、②秋雨などが続いて過湿状態、③日中と夜間の温度差が大きい、④草勢の低下等がある。このことから、かん水は控えめにしハウス内を過湿状態にしない。極端な温度差を避けて保温に努めて、草勢バランスを一定にするよう管理する。また、葉かび病や灰色かび病、ハモグリバエ類、コナジラミ類等の初期防除を徹底することが重要である。

(2) ミディトマト

ハウス周囲からの雨水の浸透や空気湿度の急激な変化によって裂果の発生が多くなるため、圃場排水を徹底し、ハウス内を過湿にしない。また、最低気温が10℃を下回るようになる頃（10月下旬）からは特に裂果が発生しやすくなるので多かん水をしない。ハウス内の湿度差が極端にならないよう夜間の保温に努める（トマトの欄を参照）。また、葉かび病、トマトサビダニ、コナジラミ類、ハモグリバエ類等の防除を徹底する。

(3) キュウリ

成り疲れによって、収穫量の減少や果実品質の低下を招きやすくなるので、かん水や追肥は遅れないようやや早めに行う。また、不良果の早期除去による品質の向上と適期収穫に努める。なお、べと病等の発生を防止するため、枯れ始めた葉などの摘葉やハウス換気を徹底し、予防散布を行う。

(4) イチゴ

新葉の展開が早いため老化した葉や発生したランナーは早めにかきとる。ただし、下旬以降は新葉の展開が遅くなるため、黄化した葉や枯れ葉をかきとる程度にする。また、最低気温が12℃以下（10月下旬以降）になれば、夕方ハウスを閉めて保温を行う。開花始めにはミツバチ等を導入する。導入後は、ミツバチ等に影響の少ない薬剤を用いうどんこ病などの防除を行なう。

葉菜類

(1) 軟弱野菜

ホウレンソウ、コマツナは10月中に播種する場合にはまだ気温が高いことから、葉が伸び

すぎないように株間をやや広めにし、ハウス換気を行う。特にハウレンソウはべと病の発生しやすい時期になるので、抵抗性品種を利用し、積極的にハウス換気を行う。また、病害虫の早期防除に努める。

2 露地野菜

果菜類・豆類

(1) ナス、ピーマン

気温が低下して生育が緩慢になるので強い剪定や摘葉は避け、追肥や病害虫防除を徹底して草勢の維持、肥大の確保を図る。

(2) 一寸ソラマメ

播種が早すぎるとウイルス病にかかりやすくなるので、10月10日～15日頃に播種する。なお、過湿になりやすい圃場での直播は種子が腐敗しやすいので行わない。ポリ鉢、セルトレイ等に播種し20日程度に育苗した本葉1～2枚頃の若苗を植付ける。

葉菜類

アブラナ科野菜は、大雨や降雨が続くと軟腐病・黒腐病等の発生が予想されるので、あらかじめ銅剤などによる予防散布を行っておく。なお、発生が見られた場合には、晴れ間を見て早期に散布する。

(1) 白ネギ

最後の土寄せは、収穫予定日から逆算して行う。10～11月収穫では、収穫30日前までに完了しておく。最終土寄せは、葉鞘径が25mm程度のときに追肥散布後に行う。緑と白の境界をはっきりさせるため、株元に隙間が出来ないように丁寧に行う（軟白確保のため）。なお、収穫が遅れると、ネギが伸びて棒ネギになるので注意する。収穫時は、出来るだけ圃場が乾燥するように努め、実施している排水対策についても溝が埋まっていないか等再度確認する。

(2) キャベツ

収穫適期を過ぎると裂球が発生しやすくなるので、収穫遅れにならないよう注意する。

秋まきキャベツは、品種特性を考慮しながら播種を行う。早期播種や多肥等によって生育が進みすぎると、抽台の原因になるので注意する。また、越冬時の排水対策は十分に講じておく。

(3) ブロccoli

出蕾してから2週間程度で収穫可能となるので、計画的に適期内に収穫を終えるようにする。収穫が遅れると花蕾のゆるみが進み、品質が低下するので注意する。なお、降雨後や花蕾に夜露等がある場合は良く振ってから箱詰めする。

根菜類・いも類

(1) ダイコン

収穫が遅れると品質低下の原因になるので、播種後55～65日頃、根径が6～7cm程度になった頃を見計らって収穫する。

(2) サトイモ

圃場を乾燥させ収穫作業をしやすくするため事前に排水対策を講じておく。親ズイキが2本程度になり黄化してきた頃が収穫適期となる。収穫作業は、晴天日の午前中に株の掘り起し、子いもの取りはずしを行う。付着の土はできるだけ落とし収穫する。3～4時間乾燥してから根取機にかける。また、種いも用に優良株を選抜しておく。

(3) ラッキョウ

分球期に入り、同時に翌春の分球芽が形成されるので追肥を行なって生育を促す。また、気温が低くなる下旬頃に白色疫病の防除を行う。

(4) タマネギ

土壌水分が低く圃場条件の良好な時に圃場準備を行う。定植時期は10月下旬～11月上旬が適期となる。定植苗は、小苗は肥大が悪く大苗は抽台が多くなるので、長さが15cm、茎の太さが2～3mm程度の苗を選別して定植する。植付けは苗の新葉部を埋めないようにする。定植後2週間程度経過し、活着を確認したら除草剤を散布する。

(5) ニンニク

10月中旬頃までに種球を植付ける。種球が小さいと大球が得られず、大きすぎると分球して品質を悪くするので10g程度のりん片(種球)を用いる。種球は10a当たり200～250kg準備し、乾腐病防除のため種子消毒を行なう。